様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６４０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２３２４

研究課題名（和文）エルミタージュ美術館所蔵「黄金の鹿」の神話と造形表象―「生命再生の鹿角」の研究

研究課題名（英文）Antlers of Rebirth : Mythic Image of the Golden Deer of Eurasia from the Siberian Collection of the State Hermitage Museum

研究代表者
鶴岡　真弓（Tsuruoka, Mayumi）

多摩美術大学・その他・特定研究員

研究者番号：８０２４５０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、先史ユーラシア草原文化の「動物意匠」の白眉であるサンクト・ペテルブルクのエルミタージュ美術館蔵のスキタイ美術の至宝「黄金の鹿」（北コーカサス、前７世紀末）の「巨角」に注目し、それを単なる装飾ではなく「生命循環」のメタファーとして解読した。古来遊牧民にとって「鹿角」は、冬に枯れ木となり地に落ちても、必ず春に再生することから、「死からの再生」の象徴として崇められてきた。
　また従来「弱肉強食」の図と解釈されてきたスキタイ「動物闘争文様」の「捕食者に殺される犠牲獣＝鹿」も、その「反転」の構図から、「生命循環」の表現が読み取れる。日本文化の鹿崇拝もユーラシアを貫く死生観から解読できるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究対象とした「黄金の鹿」は現在のウクライナにあった「スキティア」の遊牧騎馬民族のスキタイの芸術である。この鹿像は単に生態を描写したものではなく、首を挙げ前方を凝視する鹿は、たとえ捕食者に殺され犠牲となっても、その命は大自然の生命循環に捧げられ未来への「再生のための死」となるよう「祈り」造形された。
　「精霊」としての鹿神話は西はアイルランドから東はモンゴルまでに貫かれユーラシアの少数民族社会は動物美術を持続している。動物と共生した遊牧民芸術に光を当てた本研究は「新人世」と呼ばれる時代に入った私たち人類が「生きとし生けるもの」と共に生きる叡知を取り戻す根源的方法を社会的に提供できると考える。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the "Giant Antlers" of the "Golden Deer" (From North Caucasus, late 7th century BC), a treasure of Scythian Art in the collection of the Hermitage Museum in St. Petersburg, which is a highlight of the "animal design" of prehistoric Eurasian steppe culture, and deciphered it as a metaphor for the 'Cycle of Life' rather than as mere decoration for the figure. Since ancient times, nomads have revered the antlers of deer as a symbol of "Rebirth from Death" because they fall to the ground like dead trees in winter, but they always regenerate in spring.
In addition, the deer as the sacrificial beast killed by a predator, which has been conventionally understood as a picture of ``the Law of the Weak and the Strong,'' can also be interpreted as an expression of the ``Cycle of Life'' due to its life-and-death reversal composition. Japanese deer ant worship should be also rooted in the ideal symbolism of Antlers of Rebirth of the Eurasian world.

研究分野：美術史

キーワード：黄金の鹿　スキタイ美術　ユーラシア　鹿角信仰　動物意匠　生命循環　ケルト美術　渦巻文様

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、ロシア、サンクト・ペテルブルクのエルミタージュ美術館所蔵、スキタイ美術の至宝「黄金の鹿」を核に、先史ユーラシアの東西で数千年以上にわたって表現されてきた「鹿」像の「巨角」に注目し、その造形表象的意味を解明するものである。

この「黄金の鹿」（北コーカサス、クバン地方、クラスノダル近傍、コストロムスカヤ出土、前７世紀末））は遊牧騎馬民族が創造した「動物意匠（アニマル・スタイル）」の代表的作例である。本研究では生命力に溢れるこの「鹿角」の形象が、単に体躯を縁取る二義的装飾ではないことを予測し、鹿像の形態論（タイポロジー）と、鹿信仰を反映させたユーラシア東西の神話学（ミソロジー）から、多角的に「鹿角」の象徴的意味を読み解くことを目指し、本作例が「循環する生命」のメタファーとして解釈できる新たな可能性を探るため推進したものである（図１「黄金の鹿」前７世紀　エルミタージュ美術館蔵）。

図１

図２

図３

図４

「黄金の鹿」と呼ばれる金工美術はユーラシア遊牧騎馬民族文化圏に様々なヴァリアントを遺したが本作は最も重要である。ロシア、ロマノフ朝、第四代皇帝ピョートル大帝（在位 1672－1752年）が収集した「シベリア・コレクション」は、ユーラシア「動物意匠」の宝庫であり、その発掘は近代にも継承された。本作例は北コーカサス、コストロムスカヤ古墳（1903－04年にケレルメススカヤ村で発見された６つの大墳丘の１つ）から出土。盾に装飾されていた「牡鹿」のエンブレムとみなされてきた造形である。

第一に本作例研究の特徴は「黄金の鹿」の「巨角」表現に遊牧文明を背景にした「巨角の意匠化」の思想的・精神的根拠を浮き彫りにするところにある。同地で出土した同じく前７世紀の「黄金の豹」に比較すると、この鹿造形には「高貴さと光輝さ」が表出されている。動物の「写実」ではなく、有機的曲線での「角デザイン」の強調は、遊牧社会伝統の「動物と人間」の交流から育まれた生命観・死生観を孕んでいると考えた。

第二にユーラシアの鹿角表現は本研究者の造語でいうところの「ユーロ＝アジア世界」の鹿形態の編年で俯瞰すると、西はスカンジナヴィア、東はモンゴルまでに観察できる「前史」が注目できる。「石・岩の線刻画」の鹿像は金工の鹿の「原型」である可能性である。青銅器・鉄器時代「以前」に遡り、ユーラシアの「石・岩の線刻画」にみとめられる「鹿角の強調」の現地調査を必要としたゆえんである。

第三に研究の背景として、管見では従来こうしたユーラシアの「動物意匠」研究においては、スキタイの鹿造形を決定づける角の強調表現を、当該社会の「自然観」や「死生観」から読み解く「造形表象論」の研究は十分にはなかった状況があった。そのなかで本研究の開始年度に画期的な特別展が大英博物館とエルミタージュ美術館の共同で２０１７年９月－２０１８年１月に大英博物館で「スキタイ—古代シベリアの戦士たち」展が開催されスキタイ史と考古美術研究の最先端が公開された。スキタイの「原郷」は黒海北岸ではなく東方の中央アジアであることの証拠が一層示された(Simpson,St.J.&Pankova,S., *Scythians: Warriors of ancient Siberia,* Thames and Hudson,2017)。

２．研究の目的

（１）エルミタージュ美術館所蔵のスキタイ鹿造形と比較作例の調査

目的の第一はスキタイ美術の至宝、「黄金の鹿」（前７世紀末）を同美術館「黄金の間」

展示室、および、ユーラシア草原地帯文化圏から出土した「鹿造形」関係の作例（石、岩、木、革、青銅、金銀）関係を、先史文化部門（22000 年前－前世紀）で調査することである。それらは被葬者への「副葬品」や「儀礼」の祭具である。また鹿と他の動物意匠を比較する。

テキスタイルでは西シベリア南部アルタイのパジリクの第５墳（前 300 年頃）墓出土の大型フェルト掛物の「鹿の幻想獣」がみとめられ、同墳墓出土の敷物の「ヘラジカ（トナカイ）」と「騎士」の行列文様にはアルメニア、トルコ、ペルシャの工房の影響があることを念頭に、鹿角デザインに焦点を当て、ユーラシア草原文化圏で共有されてきた形態を抽出する。また南シベリアの鹿造形は、竿の頂部に据えられた儀礼用金工の鹿造形が重要であり、鹿に関係する宗教儀礼の祭具などは、ユーラシアから繋がる北米の先住民美術の鹿信仰資料を、同市のロシア国立民族学博物館でも調査する（以上サンクト・ペテルブルクでの調査は 2019 年 3 月までに実施）。

（２）ユーラシア草原文化圏と北欧までの「石・岩の線刻画」の鹿角原型の解読

エルミタージュ美術館の先史考古部門の展示作例調査の前提として、ユーラシア草原文化圏の中央に位置する、カザフスタン、キルギスタンで「石・岩の線刻画」の現地調査をおこなう（2018 年 8 月実施）。金属素材以前の石・岩を素材に「死からの再生」を反映したと推測される「巨角」の現地撮影写真に基づき形態分類をおこなう。

ユーラシアの北西端のスカンジナビア半島についても「拓本資料」（2018 年多摩美術大学芸術人類学研究所主催「はじまりの線刻画」https://www2.tamabi.ac.jp/iaa/stone-rockcarvings_as_beginnings/に展示された斎藤五十二氏コレクション）も参照し比較研究する。シベリア全体の線刻画の造形的意味と鹿信仰に関する重要文献としてＥ・ジェイコブソン『古代シベリアの鹿女神：信仰のエコロジー：*The Deer Goddess of Ancient Siberia: A Study in the Ecology of Belief*』（1993 年：未邦訳）などを手掛かりとする。

（３）ユーロ＝アジアを貫く「神話的要素」と鹿と共生の「エスノロジー」の統合的分析

「神話」と「信仰」の側面からの研究として、ヨーロッパではアイルランドのケルト神話の首領フィンが出会う「鹿女房」やハンガリー神話の建国の「新天地へ人間の兄弟を導く鹿」、北東アジアではモンゴル神話の「太陽を盗む鹿」などに共通する、「導きの精霊としての鹿」主題の共通性を読み解く。

ユーロ＝アジア「最東端部」の鹿信仰については、「神の遣い＝鹿」を崇敬する日本文化もユーラシア文明圏と不可分ではないという予測の下に、事前調査した成果（東日本大震災で被災した宮城県石巻沖の金華山の「鹿の聖域」の復興）も活かし、同じく極東の鹿文化の調査としてロシア領「サハリン」の「ニブフ族」の「トナカイとの共生のエスノロジーと伝承」の側面からも調査をおこなう（2018 年 8 月多摩美術大学芸術人類学研究所メンバーなどの協力で実施）。これら極東の島嶼における鹿文化は少数民族の教育や現代美術にも引き継がれている状況を見据え、複合的アプローチを実現する。

３．研究の方法

（１）前提：「西洋近代美術史学」のパラダイム・シフト：「動物意匠」研究史の検証

上述したように古代北方ユーラシア草原文化の「動物意匠」は、近代前期までは西洋美術史学の「古典美術」を基準とするの伝統から等閑視された。「文様・意匠」は、「抽象」の造形に力点が置かれるがゆえに、装飾美術が華やかに展開した 19 世紀末に至っても、ヨーロッパ美術史学では、「プリミティヴなもの」、即ち西洋の「外部」の美術とみなされてきた。しかし 20 世紀初頭「抽象絵画」が隆盛し W・ヴォリンガー『抽象と感情移入』（1908 年）、B・サリーン『古代ゲルマンの動物文様』（1904 年）、P・ヤコブスタール『初期ケルト美術』（1944 年）などにより、北方ヨーロッパの「動物意匠」や「文様」に本格的に光が当てられた。この学術的パラダイム・シフトの基本的検証が、本研究の方法論の土台となっている。

その要点として、サリーンの分類した「アニマル・スタイル（動物文様）」はヨーロッパを圧迫したフン族やアラン人による伝播を明らかにしたが、この「移動期」より更に千年以上も前のからの影響は解明が必要である。スキタイ系の動物意匠はスキタイ文化に留まるのではなく、黒海を西に越えたヨーロッパの鉄器時代にも反映されている。本研究の「黄金の鹿」の角の湾曲形態にも響き合う、ケルト美術の「渦巻文様」の成立にも重要であるので、本研究では「異教とキリスト教」を結ぶ中世写本装飾の動物意匠と渦巻文様の関係も見据え、「アニマル・スタイル以前の動物意匠」を考察する。

（２）スキタイ「動物闘争文様」：「弱肉強食」構図の「反転」の解読

スキタイの「動物闘争文様」での「鹿」の意味も、遊牧社会の「死生観」を浮き彫りにするために検証する必要がある。「鹿」は高速力で走る機敏な動物であるが「弱肉強食」の自然界において「捕食される弱者＝食べられてしまう命」の側に立つ「草食動物」であるが、この「動物闘争文様」は現代人が思考するような二項対立の「生 VS 死」を表現したのでではなく、そこに「反転と循環」の構図・構造を与えることによって、

「再生の予兆としての生命」を意匠化しことを推測する。
　即ちスキタイの「動物闘争文様」が「渦巻状の回転構造」を特色とするのは、自然界における鹿という「捕食される草食動物」を見つめた遊牧民にとって、「死生」を「反転」させて思考することが、常に動物と共生する遊牧・牧畜社会の「未来への生命・産出」となるからであると考えられる。「捕食する＝食べる強者」（豹やグリフィン）よりも、「捕食される＝食べられる弱者」（鹿や山羊や馬）に、より繊細なデザイン性を与え、その再生の表象は鹿の身体全体で指標されるが、そこに更に渦巻くような「鹿角」が重点として表現され役割を果たしている。それが単体で表現され、「不死の黄金」をマテリアルとして用いる場合は一層「形象と素材」の不可分の結びつきが現れると予測する。

（３） 鹿神話と造形の間をつなぐ観念の解明
　以上のスキタイ「動物闘争文様」が表現する「死生」反転の構図と、「黄金の鹿」の角モティーフの曲線形態の照応を、ユーロ＝アジアの鹿神話の側面から解釈する。本研究開始以前の調査（2016年９月モンゴル国立博物館での「オーシギーン・ウブル旧在：前７世紀」の鹿石の類）の成果も踏まえ、その作例を圧倒的に特徴付けている「鹿の走り（飛び）」の造形と神話の関係を確認する。モンゴルの「太陽＝天」へ鹿が天翔る神話は、鹿の「巨角」が「翼」のメタファーとして表現された可能性がみられる。遊牧民の鋭い観察眼が捉えた鹿の走りは、スキタイ美術の鹿の角の曲線の連鎖に通じていると予測できる。実はスキタイの鹿角は上掲（図２）のとおり「猛禽の嘴や頭部」の連鎖文様が原型としてみとめられる。エルミタージュの「黄金の鹿」の一大特徴である角も、単に頭部から「生えている角」ではなく「飛ぶための角」の痕跡が曲線の連鎖に観察できる。以上の方法によって、「鹿角」の象徴性を以下の①～④の考察に重点を置く。
① 「黄金」で造形される「鹿」の意味：墳墓の副葬品である「黄金鹿」の役割
② 「動物闘争文様」の弱肉強食の反転。「死」から「再生」のメタファーへ
③ ユーロ＝アジアの神話：ハンガリーの新都建設神話（鹿に導かれる人間）、モンゴル神話（太陽を盗む鹿）の「鹿の走り（飛び）」の観念と角造形の関係
④ 「樹木型鹿角」と「生命の樹」のアナロジー：（フィリッポヴカの「黄金の鹿」）

４．研究成果

（１） 「ユーラシア・ネットワーク」の動物意匠としての「鹿」造形の再解釈
「黒海」の北岸、古代ギリシャ人が認識したスキタイの故地「スキティア」は現ウクライナの地である。2017 年度の大英博物館特別展（「スキタイ人 ―古代シベリアの戦士たち」）に続き、2018 年度エルミタージュ美術館（博物館）地上階の「先史文化部門」の３地帯、①「シベリア」②「中央アジア」③「コーカサス」の広大なユーラシア草原文化の「鹿造形」の全容（22000 年前から前３世紀）を把握でき、個別の出土状況の特質を背景としながらも「ユーラシアの造形表象ネットワーク」に生まれた「黄金の鹿」を再解釈するための作例をほぼ漏れなく観察できた。特異な鹿造形として「幻想獣の鹿」（シベリア、アルタイ、パジリク第５号墳墓出土。大型フェルト、前３世紀）には「シャーマニズムと鹿」の関係が、また同所出土の世界最古のパイル・ラグの「騎士」と「ヘラジカ」の行列文様にはアルメニアの技法やペルシャの図像の影響が指摘されおり、スキタイ美術の技法と意匠の交流がより解明できた。同遺跡出土の立位の「黄金の鹿」の「鹿角」には体躯のサイズを上回り、天に向かうような有機的形態も認識できた。

（２） スキタイおよびユーラシア草原文化圏の動物意匠の造形史上の意義：
「人像主義＝アンスロポモルフィズム」を超える「動物像主義＝ズーモルフィズム」
　「スキタイ美術」の黄金製品は、現ウクライナに当たる「黒海」北岸の故地「スキティア」から多く出土し、そこに植民した「ギリシャ」の工人の手による作例が優品とされ「北方」美術の本領である動物表現の細部までには十分な光が当てられることがない。しかし本研究では、「人間（の姿の神々）」を世界観の中心に据えた古典的「神人同型の人像主義＝アンスロポモルフィズム」を優位に置く西洋美術史の「伝統」とは逆に「生きとし生けるもの」から世界をみるユーラシア草原文化圏美術の「動物像主義＝ズーモルフィズム」の重要性を、芸術人類学の観点から明らかにできた。動物美術は当該社会の生業や自然環境のなかで「他者かつ同朋である動物」への畏敬や愛着を「意匠化」した美術である。スキタイの「動物闘争文様」や「黄金の鹿」は、自然生命をヒトが管理し愛玩するための美術ではなく、「殺される＝捕食される＝犠牲の生命」こそが大自然の周期的な「来るべき循環」を起こすのであり、未来の時間へ「投企され」る命であるという遊牧社会の死生論が、「鹿」造形と「鹿角」に託されていたことが解明できた。

（３）巨角の原型と発展型：カザフスタンの石・岩の線刻画調査と樹木型鹿角
　巨角表現の「原型」はカザフスタン「タムガリ遺跡」（前 13 世紀：アルマトイの北西 180 キロ。「タムガリの考古学景観にある岩絵群」2004 年ユネスコの世界文化遺産に登録）の調査によってよく確認できた。それを原型とすれば究極の発展型として「巨角

の精華」ともいえるカザフスタンとロシアが接するウラル山脈南端フィリッポフカ出土の「黄金の鹿」の「巨角」表現を更に解釈できた（図３：前４世紀：ニューヨーク、メトロポリタン美術館「ユーラシアの黄金の鹿－ロシア草原地帯のスキタイ、サルマタイの至宝」展：2000 年 10 月－2001 年 2 月に出品）。クル・オバ出土の「黄金の鹿」やアルタイの刺青の巨角の鹿（図２）という他の作例とも比較できる。「鹿角」が「樹木」形態に変容し、鹿の体には動物相（ファウナ）と植物相（フローラ）が一体化して宿る意匠の生成である。枯渇しない常緑をも暗示し、副葬された意味が解明できた。キルギスタンの現代の鷹匠の装束にも「樹木としての鹿角」が刺繍されている（図４）。

（４）「黄金＝鉱物＝素材」と「鹿＝動物＝形相」が一体化した護符としての黄金美術

移動するノマド社会において「黄金のマテリアル・カルチャー」がなぜ成熟したのか。即ちユーラシア遊牧社会において「動物意匠に黄金という特別の素材がなぜ使用されたか」の本源的根拠を明らかにした。金資源の恩恵により黄金は移動民の「動産＝財」であるがそれ以上に、大自然に翻弄される人間生命と動物生命の「安寧」を祈る「護符」であり「黄金の鹿」などの黄金美術は地上の「生の場所」と「死の場所」の両方を護るものであった。上述の「フィリッポフカの黄金の鹿」（図３：高さ 51 x 奥行 30 x 幅 41 cm）は金箔を木にかぶせた鹿像で、それらが「死者にこそ与えられる永遠の生命循環」への「祈り」の具現であった証拠に、埋葬の玄室に至る入り口付近で複数発見された。「黄金の鹿」は、地上で唯一「腐食しない貴金属・黄金」を「鹿」が一身に纏った造形であることによって、共同体の「黄金信仰」と「鹿信仰」を一体化させたのである。

（５）「鹿角の再生」信仰と神話：大自然の「季節と生命のサイクル」と「鹿角の呪力」

ユーロ＝アジア世界のコアである動物意匠の宝庫では「鹿」のほか「豹・猪・狼・山羊・鷲」想像上の「グリフィン」、家畜化した「馬」などが金工・フェルト・皮革・木で表現された。しかしなぜ特別に「鹿」が「高貴な」動物意匠の主役となってきたかを別の側面、即ち「鹿角の呪力」の読み取りからも解明を試みた。大英博物館のスキタイ特別展で観察できたロシア連邦シベリア地区、モンゴルとの国境のウコク高原永久凍土から発見のミイラ「ウコクの王女」の刺青の鹿（前 5 世紀・図２）や、「鹿を口にくわえる鳥の被り物」（前４－３世紀、アルタイ、パジリク出土）や、ミイラ化した「男性被葬者の刺青」（前６－5 世紀頃・出土地同上）など「鹿を被り纏う人間」は共同体の政（まつり）ごとと祭（まつり）を司る階級の神官や呪術者である。

「被り物」の鹿角はいずれも大枝のように強調され「鹿角と樹木」の融合した「樹木型」の鹿角の形態は、「鹿」の導きによって起こされる変化や幸運を儀礼化するときに用いられたことが観察できた。近現代でも「オスカル」というケルト神話の鹿の孫の名がスカンジナヴィアの王族で好んで用いられる慣習があり、アイルランドでは EU 硬貨発行以前には国の経済に降臨するかのような「鹿」のコインを通貨の１つとしてきた。

こうして「鹿」や「鹿角」が特別な力や影響を人間界に与えるものとして敬う伝統や慣習は今日の「ユーロ＝アジア世界」の最東端部にも生きている。冬を前に予祝する日本の社寺の「鹿角切り」祭や「鹿踊り」などのルーツもユーロ＝アジア規模で考えられる可能性が得られた。西はアイルランド、スカンジナヴィア、北コーカサス、北海沿岸、ウラル、アルタイ、カザフスタン、キルギスタン、モンゴル、沿海州、サハリン、日本列島まで途切れず持続されてきた「鹿造形」と「鹿信仰」の結びつきはこれからの人間と自然の関係を鋭く照射する「人新世の生命論」への問題提起となると考えられる。

◆図版キャプション

（図１）「黄金の鹿」北コーカサス出土　前７世紀　エルミタージュ美術館蔵

（図２）猛禽類の頭部をもつ鹿の刺青（部分）前 5 世紀頃　アルタイ　パジリク時代古墳群出土　ゴルノアルタイスク　アヒーノン博物館蔵

（図３）「黄金の鹿」ウラル地方南部　フィリッポフカ古墳出土　ウファ 考古学博物館蔵

（図４）鹿角の装束文様　©Mayumi　Tsuruoka

◆図版出典

図１ https://www.metmuseum.org/exhibitions/listings/2000/golden-deer/photo-gallery

図２ https://en.wikipedia.org/wiki/Siberian_Ice_Maiden#/media/File:Tatoo_motif_on_the_arm_of_the_Siberian_Ice_Maiden.png

図３ https://www.metmuseum.org/exhibitions/listings/2000/golden-deer/photo-gallery

図４　撮影：鶴岡真弓　キルギスタン　2018 年 8 月 調査

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 14
２．論文標題 「ケルト渦巻」と「生命循環」ー よみがえる深層	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ユング心理学と生命循環	６．最初と最後の頁 15－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 1
２．論文標題 「奇」は「終わり」からはじまる ー「ワンダー/驚異」の反転力	５．発行年 2022年
３．雑誌名 奇界世界	６．最初と最後の頁 3－14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 27
２．論文標題 ケルト・アニメ「三部作」にみる自然信仰	５．発行年 2021年
３．雑誌名 コージャス：山陰日本アイルランド協会会報	６．最初と最後の頁 1－3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 1
２．論文標題 『銀鏡SHIROMI』に発光する「星と人の生命循環」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 星への祈り　銀鏡神楽	６．最初と最後の頁 70－73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 1
2．論文標題 「所作の書」の仰角ー岸田将幸の詩耕へ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岸田将幸展：前橋文学館	6．最初と最後の頁 26－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 17
2．論文標題 鳥のトーテミズム ―ユーロ=アジアの東西をつらぬく動物意匠	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Art Anthropology：多摩美術大学　芸術人類学研究所紀要	6．最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 1
2．論文標題 多摩美術大学美術館・受贈「寺田コレクション」の誕生 ―センス・オブ・ワンダーの魂	5．発行年 2021年
3．雑誌名 寺田小太郎いのちの記録：多摩美術大学美術館	6．最初と最後の頁 8－11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 1
2．論文標題 「刻」の創造　―「万象の息吹を浴びる」海老塚耕一の軌跡	5．発行年 2021年
3．雑誌名 海老塚耕一　I：空無から生じる風景：多摩美術大学美術館	6．最初と最後の頁 14－15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 6
2．論文標題 ホモ・ネカーンスの「装飾」　：ケルト、シベリア、日本に至る ユーロ＝アジア文明の業	5．発行年 2021年
3．雑誌名 甕星	6．最初と最後の頁 82－87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓　鶴岡真弓（対談共著：米澤敬）	4．巻 1
2．論文標題 本の「ざわめき」、身体性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 読書人　（https://dokushojin.com/reading.html?id=8288）	6．最初と最後の頁 8－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 -
2．論文標題 「『皮膚』と『装飾』――生魂の被膜としてのフィルム」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 「瞬く皮膚　死から発光する生」展図録、足利市立美術館	6．最初と最後の頁 134-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 -
2．論文標題 「『装飾』の生命循環：「再生」を祈る密儀」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『サイクル（岩田壮平作品集）』、新生堂	6．最初と最後の頁 50-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 -
2．論文標題 ”Life Cycle in Art of Soshoku or Ornamentation”	5．発行年 2020年
3．雑誌名 CYCLE（S.Iwata’s Catalogue）、SHINSEIDO	6．最初と最後の頁 51-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 -
2．論文標題 「『ケルトの深い森』『ウルフウォーカー』：『オオカミなんて怖くない』の通念を超えて」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 映画『ウルフウォーカー』プログラム、チャイルドフィルム	6．最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 1月号，Vol.59
2．論文標題 「ケルト文化とアングロ＝サクソンの支配―ブリトン人『アーサー王』の称揚」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『時空旅人』、三栄	6．最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 16号
2．論文標題 「アイルランド発「ケルト三部作」アニメとジャック・B・イェイツ ―「ケルティック・リヴァイヴァル」100年の文脈」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『Art Anthropology』、多摩美術大学芸術人類学研究所	6．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 27
2．論文標題 「ケルトとユーロ＝アジア文明の＜自然信仰＞：神話と芸術における＜生命循環＞」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『CARA』（日本ケルト協会）	6．最初と最後の頁 pp.1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 15
2．論文標題 「『根源からの思考』－時空のクロッシング・ポイント」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『Art Anthropology』（多摩美術大学芸術人類学研究所）	6．最初と最後の頁 p.2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 15
2．論文標題 「ユーロ=アジア世界の『天の時間』と『地の時間』－分節から循環へ」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『Art Anthropology』（多摩美術大学芸術人類学研究所）	6．最初と最後の頁 pp.34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 15
2．論文標題 「『ユーロ=アジア文明』の探究－1970年代から現在へ」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『Art Anthropology』（多摩美術大学芸術人類学研究所）	6．最初と最後の頁 pp.65-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 33
2．論文標題 「『エキゾティック・デザイン』の還流と再創造－唐の『沈没船』から発見された中国とアラビアの『パルメット文様』」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『多摩美術大学紀要』	6．最初と最後の頁 pp.99-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 33
2．論文標題 「『殺される鹿』と『導く鹿』ーメソポタミア・ペルシャ・シベリア・中国を横断した『鹿角信仰』の造形表象」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『多摩美術大学紀要』	6．最初と最後の頁 pp.173-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 14
2．論文標題 「『トランスポート／移動』と『トランスフォーム／変容』の物質生命へ」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『Art Anthropology』	6．最初と最後の頁 p.2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 14
2．論文標題 「〈未生〉の支持体（シュポール）ー文字と文様からの生命誕生ー」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『Art Anthropology』	6．最初と最後の頁 pp.11-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 14
２．論文標題 「『芸術人類』の誕生と『ユーロ＝アジア文明』ー『抗い得えぬもの』を起爆としてー」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『Art Anthropology』	６．最初と最後の頁 pp.58-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 7号
２．論文標題 ケルト、シベリア、ユーロ＝アジア文化圏にみる「鹿信仰」ー反転変容としての「鹿角」の表象	５．発行年 2018年
３．雑誌名 身心変容技法研究	６．最初と最後の頁 109ー122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 １３
２．論文標題 ケルト神話からみる「精霊の鹿」信仰ー「再生」「復興」への反転力	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Art Anthropology	６．最初と最後の頁 54－58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鶴岡真弓	４．巻 １３
２．論文標題 ケルト・アイルランドの「巌・島・海」の異界と「生命循環」論	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Art Anthropology	６．最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴岡真弓	4．巻 49
2．論文標題 「女神土偶」と生成のコスモゴニー ： 縄文・古ヨーロッパ・ケルトを貫く文様表象	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 130ー149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　16件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 鶴岡真弓
2．発表標題 「ケルト渦巻」と「生命循環」ーよみがえる深層
3．学会等名 日本ユング心理学会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 鶴岡真弓
2．発表標題 ケルト・アニメ「三部作」にみる自然信仰 ーイェイツ兄弟の芸術と共に
3．学会等名 山陰日本アイルランド協会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 鶴岡真弓、岸田将幸、篠原誠司
2．発表標題 「発光する命、皮膚としての写真」
3．学会等名 足利市立美術館「瞬く皮膚、死から発光する生」展 特別イベント（招待講演）
4．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓、宮本英尚、張競
２．発表標題 「終末と再生の隠喩：生命循環」
３．学会等名 「崖東夜話：第2部 魂のかたち」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 『芸術人類学講義』からの言葉
３．学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所・芸術学科共催「第8回『土地と力』シンポジウム　BEING ALIVE――芸術人類学の視点から」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 映画『ウルフウォーカー』（チャイルドフィルム、2020年）シネマアフタートーク
３．学会等名 恵比寿ガーデンシネマ、横浜ジャックアンドベティ、シネマテークたかさき等・録画上映（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「『ウルフウォーカー』と「ケルト三部作」の背景を読み解く」
３．学会等名 チャイルドフィルム、YouTube動画配信、https://youtu.be/-946hFTb0ek（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「死からの再生①芸術人類／学からみるパンデミックと「共同性」への道」
３．学会等名 東京自由大学「感染症と文明―新型コロナ・ウイルスをめぐって」第7回 、オンライン開催（https://t.co/2bI1BgDuav?amp=1）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「死からの再生②ケルト文化の受難から救済への道」
３．学会等名 東京自由大学「感染症と文明―新型コロナ・ウイルスをめぐって」第8回 、オンライン開催 （https://www.youtube.com/watch?v=_0IbHun72jk&t=444s）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「ケルトとユーロ＝アジア文明の＜自然信仰＞：神話と芸術における＜生命循環＞」
３．学会等名 日本ケルト協会 創立25周年記念／ケルトセミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「ユーロ=アジアの異形：飾りと浄めの起源：ケルトから日本までの1万キロ」
３．学会等名 NPO法人東京自由大学「神話と曼荼羅：ユーロ=アジア祈りの旅」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「秀吉の陣羽織の世界性：ペルシャ・ユーラシア・日本をつなぐ装飾文様」 霊屋室中特別公開記念「桃山浪漫特別講座」
３．学会等名 鷲峰山高台寺 霊屋室中特別公開記念「桃山浪漫特別講座」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「韓国民画の動物」 （「韓国民画の日本民芸運動への影響」発表を受けての討議）
３．学会等名 芸術人類学研究所「2019年度 ユーロ=アジア部門 研究会討議」
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「ケルトの治癒信仰について」（「痛みをめぐる古代ケルト人の民間信仰」発表を受けての討議）
３．学会等名 芸術人類学研究所「2019年度 ユーロ=アジア部門 研究会討議」
４．発表年 2020年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「悲と愛をものがたる～文学、アート、落語の秘技」
３．学会等名 NPO法人東京自由大学20周年企画特別講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「『ケルズの書』の動植物文様と図像」
３．学会等名 言叢社研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 「鹿信仰」と神話図像
３．学会等名 上智大学・身心変容技法研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 “成りつつあること Becoming” を見つめるケルト的想像力 ―『ケルズの書』から「アーサー王の剣」まで
３．学会等名 イギリス児童文学学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 ケルト・アイルランドの「巌・島・海」の異界と「生命循環」論
３．学会等名 多摩美術大学芸術人類学研究所・土地と力シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 鶴岡真弓
２．発表標題 アイルランドのケルト十字架：生命再生の螺旋と円環
３．学会等名 上智大学・身心変容技法研究会シンポジウム
４．発表年 2017年

〔図書〕　計9件

１．著者名 鶴岡真弓（共著）	４．発行年 2022年
２．出版社 青幻舎	５．総ページ数 185
３．書名 マイ・ファースト・リチー上野リチのデザイン	

１．著者名 鶴岡真弓（共著）	４．発行年 2021年
２．出版社 工作舎	５．総ページ数 248
３．書名 最後に残るのは本	

１．著者名 鶴岡　真弓	４．発行年 2019年
２．出版社 平凡社	５．総ページ数 404
３．書名 『鶴岡真弓対談集 ケルトの魂ーアイルランドから日本へ』	

1．著者名 鶴岡　真弓	4．発行年 2020年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 272
3．書名 『芸術人類学講義』	

1．著者名 鶴岡真弓	4．発行年 2020年
2．出版社 多摩美術大学	5．総ページ数 330
3．書名 『『ケルズの書』とユーロ=アジア世界』	

1．著者名 鶴岡 真弓	4．発行年 2018年
2．出版社 日本ヴォーグ社	5．総ページ数 158
3．書名 装飾デザインを読みとく30のストーリー	

1．著者名 鶴岡真弓	4．発行年 2017年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 250
3．書名 ケルト 再生の思想ーハロウィンからの生命循環	

１．著者名 鶴岡真弓	４．発行年 2018年
２．出版社 青土社	５．総ページ数 562
３．書名 ケルトの想像力ー歴史・神話・芸術	

１．著者名 鶴岡真弓	４．発行年 2018年
２．出版社 日本ヴォーグ社	５．総ページ数 158
３．書名 装飾デザインを読みとく３０のストーリー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「病を鎮める生命デザイン」HP掲載『トイビト』（朝日新聞社／2020年7月）
https://www.toibito.com/column/humanities/ethnology/2594
「ケルト文化の魅力ー＜自然の生命＞を敬う心と知恵の泉」『好書好日』（朝日新聞社／2020年11月）
https://book.asahi.com/jinbun/article/13871753
「美の壷『不朽のデザイン 市松文様』」インタビュー出演（NHK／2020年11月）
https://www.nhk.jp/p/tsubo/ts/3LWMJVY79P/episode/te/P5RNY4MJ6Q/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関